

テイル形の分析的考察

著者	吉田 雅昭
雑誌名	言語科学論集
巻	13
ページ	123-134
発行年	2009-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/48324

テイル形の分析的考察

吉 田 雅 昭

キーワード: テイル形、アスペクト、形態素、継続相、存在性

要 旨

テイル形はアスペクトからの考察が主だが、本論では動詞のテ形と存在詞イルが結合した二単語的側面も認められると考え、テとイルの機能をそれぞれ考察した。テは事態の開始と完了の局面を表し、開始なら動作継続、完了なら結果継続の意味を表すと規定した。静態動詞や反復ではテの機能が希薄になり、完了した事態が過去へと移行すると効力の意味になるとも考えた。またイルの機能は、テ形が状態性を表すと中和され、歴史的事実等では視点の明示へ変化することも述べた。

1. はじめに

文法研究のアプローチには大きく言うと、理論面から迫る方法と形式自体に焦点を当てる方法が存在する。その理論の中でも、より形式と結びつける概念として文法カテゴリーが設定されるようになった。特に述語部分ではアスペクト、テンス、モダリティなど多くのカテゴリーが存在する。そして、個々のカテゴリーにどの形式が対応するかという点が、文法研究のメインテーマの1つとなっている。

本論で扱うテイル形に関しては、文法カテゴリーの中でもアスペクトを表現し、アスペクトの中でも継続の意味を担うという考えが、奥田靖雄などの研究以来、共通認識になっているといえる。このようなカテゴリー重視のやり方は、はじめに一定の理論をもって分析を行う点では、やはり理論から迫る方法だと思われる。それに対し、本論は形式そのものがどう成り立ち、その成分(形態素)がどんな機能を担うのかを考えていくという、形式からのボトムアップといえる方法で進めていきたいと考える。その意味で、分析的な考察方法だといえるのである。

このようなやり方は、形態素主義として批判されることもある。そこで、以下ではまず形態素、そしてそこから波及する単語の問題について見ていきたい。基本的には‘テ’と‘イル’それぞれ一定の役割があると考ええる。また、イルに関連する、主体の存在という側面から、テイル形の下位分類を述べていくことにする。

2. 形態素主義とアスペクト考察との連関

形態素主義という用語は、鈴木(1996:278)に明確に記され、批判されている。

形態素を基本的な単位とする文法論は、単語の優位性・基本性を無視あるいは軽視するから、単語を媒介にしないで、形態素を直接に文および文の成分とかわらせる。そこでは、文の内部構造は形態素および形態素結合のむすびつきとしてとらえられる。文の成分も否定されたり変質させられたりする(中略)こうした傾向を構文論における形態素主義とよぼう。

ここで、単語を言語の基本単位とするという強固な主張があり、形態素はあくまで単語の下位成分と位置づけられる言語単位であるという主張は押さえておく必要がある。形態素主義を批判する鈴木は、いわば単語主義とも言える立場に立ちながら、単語の構成という視点から形態論を考えているのである。¹

形態素主義	形態素⇒(単語)⇒文	形態素と文を直接結びつける(単語軽視)
単語主義	形態素⇒ 単語 ⇒文	形態素と文は単語を経由して関係する

この2つの主義は、単語主義的立場から見れば、構文論の中で単語を重視するか軽視するか之差だが、実際には多様な意見がある。益岡(2000:185)に「活用語尾は文または従属節の構成要素でもあるし、また単語の構成要素でもあるというのが本稿の立場」とあるように、形態素を重視するからといって必ずしも単語を否定することにはならない、というのが多くの立場であろう。ただし単語主義からは、単語を認める一方で形態素(ここでは益岡の活用語尾と同じ概念と考えてよい)を文の構成要素とする時点で、やはり形態素主義ということになるのである。²

そして、「形態論的なカテゴリーと形態論的な形が形態論の主要な対象 鈴木2008:4」であり、文法的なカテゴリーが述語(特に動詞)に観察されるわけなので、文法の形態論的な考察は、述語の語形変化に集中することになる。ここで、文法的カテゴリーと形態論的なカテゴリーという用語が出てくる。類似する概念だが、文法的という、一般的には意味的な類別に比重があるのに対し、形態論的という、「言語学研究会のような厳密な形態論的二項対立として(形態論のカテゴリー) 岩崎2000:28」と言われるように、二項対立的な体系に限定されるイメージがある。

鈴木(1996:89)には、形態論的なカテゴリーの中に複数の形を認める図が示されているが、形態論的だからといって二項対立になるというわけでもない。しかし、同じ鈴木(1996:91)には二項対立的な動詞のカテゴリー整理が行われており、二項対立的な

発想が鈴木など(言語学研究会系統)には色濃いことも確かである。³

この二項対立的発想が研究のエポックメイキングとなったのが本論で扱うアスペクトで、奥田靖雄の以下の言及は有名である。「もし、site-iruが動詞のアスペクトアルなかたちであるとすれば、〈つい〉になる、もうひとつのアスペクトアルなかたちをもとめなければならないことは、言語学の方法論上の初歩である。(中略)site-iruという文法的なかたちは、suruという文法的なかたちと対立的な関係をむすびながら、アスペクトの体系をなして、いまかりに、suruを〈完成相〉、site-iruを〈継続相〉と名づけておこう 奥田1985:107」。

奥田の論は、明らかに二項対立を軸にしている。しかしこの論は守屋(1994)で「[スル]と[シテイル]は、基本的に[シテイル]がもう一方の形式[スル]を内部に含む形式であり p66」と述べ疑問を呈しているように、同じレベルでル形とテイル形を扱うのは、強引だと感じられる。形づくりとして〈動詞のテ形+イル〉という成り立ち、そしてテ形補助動詞グループの中での考察という観点は、アスペクトという文法的側面を離れて、認めねばならない。テ形には、シマウ、オクなど様々な動詞が付く。イルが〈存在〉という最も基本的な意味を表し、使用頻度が高いことは事実だとしても、テ形グループであることには変わらないのである。

アスペクトという概念に関しては「動詞の意味するものを、「まだ」まりのある完了したもの」として捉えるか否かで完了体(perfective)と不完了体または未完了体(imperfective)という2つの「体」を区別するが、スラヴ諸語では、動詞の一部を除いて、完了体あるいは不完了体のいずれかに区分される 亀井他編1996:8」といわれる。元々ロシア語などスラヴ系諸語で発達した概念で、それが二項対立的体系だったため、形態論的な文法考察の中でも自然に受け入れられたのだろう。⁴だが上記の完了／不完了(完了は完成とも言う)の対立が、日本語では完成／継続の対立に置き換わっているのである。本論ではテイル形だけ取り上げるが、例えば、

(1) お父さんは今、本を読んでいるよ

動作継続といわれるタイプだが、この動作「読む」は、不完了である。一方、

(2) この肉は、くさっているよ

「くさる」などの変化動詞にテイル形が下接すると、結果継続を表すと言われる。しかし「くさる」という動き自体は、完結したものであり、つまり発話時点と同時に動きが継続しているわけではない点で、「読む」のような動詞の動作継続とは、質的に大きな異なりがあるといえる。またイルに関してだと、(2)では「肉」という主題は発話時

点で存在し、この点で動作・結果継続に違いはない。ところが、

(3) 徳川家康は、1603年に江戸幕府を開いている

いわゆる記録や歴史的事実だが、発話時点に家康は存在していない。動作・結果継続とは異なり、イルの機能が希薄なタイプだと考えられるのである。

本論では、テイル形のテの機能と、存在を表すイルの意味という2つの側面から考察することが有効だと考えるものである。元々この形式は、時枝(1950)ではイルを形式動詞にし、テ形は連用修飾語として扱っていたように、文法研究でも完全に一体化した形式として考えていたわけではなかった。⁵用法により形式の一体性には差があるとも考えられるが、つまり、テ形にしてもイルにしても、それぞれ動詞(イルは存在動詞)としてある程度自立しており、形態素として機能するばかりではないといえるのである。単語と形態素は概念としては区別されるが、形式動詞などでは同じ形でも単語性には差があり、テイル形についても2つの成分を切り離し、動詞の接続という視点を持つことも必要と思われるのである。

3. テの機能

テという形態素は、古典語で完了を表したツの活用形から、文法形式として発展した。～シテという形は、～シと共に連用(中止・中立)形として使用されている。この2つの差はあまりないが、一応分けて扱われる。三上(1953:229)では、

(4) 洋書ヲ買ヒ、ねくたいヲ買ツタ

(5) 洋書ヲ買ツテ、財布ヲ空ニシタ

(6) 洋書ヲ買ツテ、ねくたいヲ断念シタ (番号は筆者が付けたもの)

という例を挙げ「後の方は一方の動作がはつきり終ってから次の動作が行われたという心持、或いは前の動作が終ったことによって次の結果が出てきたという心持がある」と述べる。そして動詞活用に関し、～シ系統を基本語幹、～シテ系統を完了語幹として2本立てで論じている(三上2002等)。完了というのは伝統的にタ形の意味として言われていたが、タがタリ(テアリ)から変化したという事実も踏まえつつ、活用において形態に意味を引き寄せて扱うのが三上の考え方である。⁶

これに関連し、生成文法の立場から、久保(1994:94)には「後置詞分詞構文とはV_iPで表されている動作を後置詞で囲むことによって「動作」を「ことがら」に変え、その「ことがら」がV₂だという形式である。(中略) 後置詞でV_iPを「ことがら」に変え、そのことがらが「いる」つまりそんざいしているのである」という論述がある。ことが

らという操作には、動作をひとまとまりのものとして扱う発想があると思われる。テに完了の意味を読み取り、またイルの存在の意味を際立たせた解釈であり、テイル形を二語的(分離的)に見なしている考察である。

しかし、動作継続といわれるタイプは、その事態は完了していない。

(7) 山田さんなら外でトラックに荷物を積んでいるよ

(8) 飛行機がビルの上を飛んでいる

(9) 今近くの山で火事が起きて、たくさんの木が燃えているらしい

これらは動作動詞といわれるタイプだが、(1)(7)のように動作主が意図的に行う文もあれば、(8)(9)など、もの(非動作主)がガ格になる文もある。動作継続の意味を表す際、テ形で述べられている事態は、発話時より以前に<始まった>ことを示しているが、<完了した(終った)>わけではない。この点で、形式的には三上の言うように完了語幹だとしても、実は<開始>を表すのが、テの機能といえよう。限界達成という用語を用いれば、<開始限界達成>を示すのである。限界達成性という用語は一般的に動詞の内的性質について言われることが多いが、動作動詞でも、

(10) お父さんはもうこの本を読んでいるよ

この文では‘読む’行為は、発話時より以前に行われて、明らかに事態は<完了>している。このテは<終了限界達成>を示しており、ここに、動詞分類とテイル形の表す意味とが、機械的な対応ではないことが明らかになる。

アスペクトに関する動詞分類で‘よむ’は主体動作動詞に分類されるが、この動詞は語彙的意味としては<開始限界達成>を表すとされる(工藤1995)。これにテが付くと、事態の開始を示すのだが、(10)のように文の成分から事態の終了を明示させれば<終了限界達成>となる。なお、変化動詞にテがつくと<終了限界達成>を一義的には表すことになる(例文2)。結局、テイル形におけるテの機能は、

・事態の終了が読み取れる ⇒ ～テが事態の<完了>を表す

・事態の終了が読み取れない ⇒ ～テが事態の<開始>を表す

ということである。つまり、テという形態素は発話時点で、ある事態の開始を表す機能を共通して有しているが、事態が終了している場合には完了の表示へとシフトすると考えられるのである。通時的に見れば、三上のように完了の意味を重視する立場もあり得るが、共時的に考え、事態の開始を表す点を重視したいと思う。⁷

2節でアスペクトは完了体と未完了体の区別が基本にあると述べたが、日本語のテイル形に関すると、完了も未完了も両方表せるのである。奥田などの立場では、動

詞ル形にひとまとまり性と完成相という規定を与え、それに対立させてテイル形が継続相となるが、継続の中には完了・未完了共に含まれて、元来のアスペクト的二項対立にはなっていない。やはり、テイル形はル形と対立する場合と対立しない場合との両方ある、といえるのではないだろうか。「シテイルにはインパーフェクティブ(不完成相)の規定は与えられない 野村2003:10」という指摘は、妥当性があるといえるのである。形態論的な考え方から、ル形に完成相という1つの規定を与えたのと同じレベルで、テイル形に不完成相という1つの規定を与えても、テイル形の説明を覆いつくせない。日本語の考察において、アスペクト概念は意味論のカテゴリーとして受け入れるに止めるのが実態に即すと思われるのである。⁸

なお、テイル形を継続相とする点は、イルの存在性も絡んだところで規定される限り正確なものだと思われるが、2節でみたように用法によって継続とは言い難い場合でも使用されている。テイル形に対する継続という捉え方については、イルと文の主語との関係なども踏まえ、節をあらためて考察していきたいと思う。

4. 継続相の事態性質と存在性

テイル形を分析的に考察すると、存在動詞としてのイルも浮かび上がってくる。例(8)(9)など、ハ・ガ格(主語)がものであれば本動詞としてはアルを使うのに対して、～テの後ではイルを用いる点は本動詞と異なる。だが、イルも存在を表すことに変わりない。⁹野村(2003:4)の「シテイル形式のみを動詞のアスペクト形式とのみ規定することは、動詞の側からのみ事柄を捉えているという点で、やはり一面的とも言わねばならない。全体述語としてのシテイルは存在詞的側面を持っているからである」との指摘は、テイル形の考察で、イルの部分にも目を向けることの必要性を述べたものである。ただ、存在といっても、テイル形の中には差も見られるのである。まず、テ形とイルが同じように存在詞的になる場合から述べてみたい。

(11) 田中君の英語力は、非常にすぐれている

(12) この地域の土地は、じゃがいもの栽培に適する／適している

工藤(1995)等で静態動詞とされるグループには(11)など常にテイル形で使われる動詞(金田一春彦の言う第4種の動詞)や(12)のようにル形とテイル形の差がほとんどないタイプがある。これらは形容詞文に近いタイプで、アスペクトの対立がないといえる。それと同時に、本来はイルが表す存在の意味をテ形の側が担うと考えられ、つまり状態性という事態の性質のために、事態の開始と完了を表すテの機能が希薄

になっているタイプだと位置づけられるのである。また、

(13) 日曜日の夕方はいつもスーパーに行っています／行きます

(14) 最近健康のために多くの人がサプリメントを飲んでいるね／飲むね

これらは反復・繰り返しといわれるタイプだが、(12)と同様にテイル形、ル形が共に使われ、やはりテの機能が希薄である。ただし‘いつも’など文全体の意味づけにより、はじめて反復の解釈が生じているわけである。動詞単独でアスペクト対立を中和する静態動詞に比べると、事態の開始と完了の局面をより読み取りやすく、イルの存在の意味も、静態動詞のテイル形より強いといえるのである。¹⁰

次に、(1)や(7)～(9)で見た動作継続のタイプがある。

(15)=(1) お父さんは今、本を読んでいるよ

(16)=(9) 今近くの山で火事が起きて、たくさんの木が燃えているらしい

上述のように、動作継続は、事態の開始という局面がテにより明示されている。

(17) お父さんは、毎日本を読んでいるよ

‘毎日’などを入れれば反復タイプに変化し、その差は連続的なものだが、動作継続ではテ形で表される事態が一定の時間的幅を持っている。静態動詞や反復タイプに比べて形の状態性が低く、動作性を表すタイプである。そして「お父さん」「ブロンズ像」といった文主語の存在性は<イル>が主に担うと考えられる。シテイルのアスペクト側面をテ形、存在詞的側面をイルが表すわけで、文主語の持つ、動きと状態の二側面を、～テとイルが分担しながらも統一させているのである。

ここで、もう1つ、結果継続のタイプについて述べる必要がある。

(18)=(2) この肉は、くさっているよ

(19) 弟は、先週から実家に帰っている

(20) 彼は、来週提出する書類の核となる部分まで書いています

結果継続は「(運動が:筆者注)終了限界に到達した後の結果段階 工藤1995:81」とのように規定される。本論の立場からは、この<終了限界の到達>という部分を重視したい。この終了が前節に述べたテの事態の<完了>を表すという機能に対応し、動作継続とはテの働きが大きく異なることを重視するからである。

結果継続の分析では、変化動詞のテイル形は結果継続を表すとされるように主体の変化という側面が注目される。だが、例(20)など動作動詞であっても‘～まで’という動作の限界点を文の中で明示させれば、結果継続の解釈となる。変化動詞とされる(19)の‘帰る’も、(動作)主体に変化が生じたと言うよりも、テイル形を用いた場合、

動作が完了したと解釈されることから、結果継続に振り分けられていたといえるのである。主体の変化とは付随的に生じる現象で、テ形の解釈としては完了の側面が重要なのである。また結果継続のイルも、発話時点における主体の存在を表しており、イルの働きとしては動作継続の場合と同じだといえよう。

結果継続については、いわゆるパーフェクト相と関連して扱われることがある。そこで、まずパーフェクト相の概念や問題点を次節で述べることにしたい。

5. パーフェクト相の事態性質と存在性

アスペクト研究でパーフェクトの概念を大きく広めた工藤(1995)では、その規定に当たり次の3点を強調している(以下は、筆者が工藤の定義をまとめたもの)。

- ①発話時点、出来事時点と共に<設定時点>を設ける
- ②設定時点より出来事時点が先行し、(テンスのな) <先行性>を含む
- ③運動の<完成性>と実現後の<効力>を設定時点で複合的に捉える

本論で扱っているテイル形は、設定時点と発話時点が同時と考えてよい(未来時についてはここでは無視する)。残りの定義に関してだが、③に運動の完成性という用語が出てくるが、これは本論でいうテが事態の<完了>を表す場合を指すと考えてよい。出来事時点は、必ず発話時点より先行するのである。そこで、問題になるのは<効力>という概念である。これは<結果・効力>とも言われるように、前節で述べた結果継続における結果概念とかなり共通しており、そこから「結果継続=状態パーフェクト 工藤1995:124」と2つの概念を同じく解釈することもある。

だが、それには異論もある。パーフェクト概念に関して、岩崎(2000:34)では、

(21) (死体を見つけて) あっ、人が死んでいる

(22) 彼は三年前に死んでいる

(番号は筆者による)

(21)を結果継続、(22)を現在パーフェクトと分けても有意義ではなく「パーフェクトは、結果継続の一バリエーションとして認められるべきもの」との提案をしている。しかし3年前の行為を結果として位置づけるのは違和感がある。結果というと(18)(19)のように発話時から近い事態であって、(22)のようにまだ過去と言うほど昔のこととは思われないからである。やはり、<過去>と見なせる事態はテイル形の中でも<効力>として<結果>と区別しておきたい。これは意味的な区別であって、テの機能としては事態の完了しか示さない。つまり<完了>の下位分類として、連続的ではあるが、意味的概念として結果と効力を区別したいと考えるのである。¹¹

そこでテ形が効力を表す場合だが、この中でも微妙な違いがある。

(23)この仏像は、千年前につくられている

(24)ヴェルサイユ宮殿は、17世紀にルイ14世が築いている

(25)=(3)徳川家康は、1603年に江戸幕府を開いている

(23)は、目の前にある対象＝仏像を主語(主題)として、その仏像が過去につくられたという事実を述べているが、主語が発話時点で存在する(イル)点では継続相と共通である。だが、事態の発生は、発話時から切り離された過去である。この点は(24)のように、動作主を明示した文だと更に明らかになる。主語である宮殿は発話時に存在しているので、イルの存在性は生きているのだが、築くというテ形の主体ルイ14世は発話時において存在していない。テイル形の中に、動作主の非存在と対象の存在という異質の存在性を抱え込んだタイプなのである。

この主語の非存在が更に進んだ構文が、(25)である。この場合‘開いて’とイルの主体は同じ徳川家康であり、しかも発話時点では、とうに死んだ<非存在主体>にも関わらずテイル形が使われているのである。そこで、このイルは、‘家康’という文の主題を話題として発話時点に据え置くという<現在時の視点>を示す機能を有すると考えてみたい。パーフェクト相の考察で示された設定時点とは、本論でいう視点の意味と解釈できるが、いずれにせよ多分に心理的な概念なのである。ただ、(24)でも‘ヴェルサイユ宮殿’が火事などで消滅したとしても、歴史的事実としての知識があれば、テイル形を用いても問題はない。

効力という概念は、現実存在する事物に関する出来事から、過去にその事実があったという知識さえ有していれば非存在の事物にも適応できる幅広いものである。イルは、視点として現在を保ちながら、現実には存在しない主語とも呼応する形式なのである。テイル形として一語化が進んだことでイルの使用範囲も広がったのだが、～テの部分が完了から過去へ変化した場合、存在詞としてのテイル形において、存在の意味をイルが一手に担っているとも考えられるのである。

パーフェクト相という概念は、効力を表す場合に限定させたいと思う。継続相での考察、またテ形とイルの機能を合わせ、次節でテイル形の全体像を示したい。

6. まとめ

本論は、日本語のアスペクト体系の中でのテイル形という方向ではなく、形式そのものの成り立ちから、～テとイルをそれぞれ分析するという立場だった。勿論、～

テの部分のアスペクトの意味がテイル形の中で実現されることに間違いはないのだが、ル・タ形を、事態をひとまとまりに扱う完成相と規定すると、アスペクト的に対立する不完成相は、テイル形の中でも動作継続に限られるのである。更に、パーフェクト相を認めると、もはや二項対立の概念は維持できないだろう。

また、イルが専ら表す存在という意味合いも、静態動詞や反復の文では、～テの部分が状態性を持つことでその役割は半減する。一方記録・歴史的事実では、視点を現在に置くという心理的概念にまで変貌するのである。このように、テイル形の意味の幅は大きいといえるが、テの機能や事態の性質などにより、一定の分類分けをすることができる。それを、次のように表してみることにする。

テイル形のアスペクト性と存在性の相関

アスペクト相	事態の性質	テの表す局面	イルの存在性	主語の性質
状態性<アスペクト中和>		限定なし (テの希薄化)	事態の状態性 と一体化する	恒常的
反復	連続性			連続的
動作継続	動作性	開始	発話時点に おける主語の 存在の表示	個別・ 具体的
結果継続	結果性	完了		
パーフェクト	効力性	完了から 過去へ移行	視点の明示	非存在

アスペクトとしては、事態のどの局面を表すかというテの機能を重視し、そこに現在使用される用語を対応させた。反復相は事態としては状態性を表すが、個々の動作の繰り返して、個別的事物(主語)が時間軸に連続しながら存在する点で、静態動詞などと異なると捉えた。結果継続相は、直接には変化動詞よりも、完了を表すテの機能からその意味が生じると考えた。未完了の事態に動作、完了した事態には結果というアスペクトの意味を当てはめたわけである。また、完了した事態が発話時から切り離され過去へと移行するに従って事態の性質も結果から効力へとずれていくと考えた。それに合わせ、パーフェクト相の範囲を過去の事態が表される場合に限定した。なお、歴史的事実のように主語が発話時に存在しないタイプは、存在詞的側面から見るとテイル形の中でも異質なのだが、アスペクト的にはパーフェクト相の下位分類としてよいであろう。ここで述べた区別には、連続性があるのだが、細かい線引きなどは課題である。また、アスペクト体系全体でのテイル形の位置づけなど、論じべきテーマは多い。更に追求したい。

注

- ¹ 鈴木は、自身の書に形態論という名称を付けている。「単語が文から相対的に独立し、言語の基本的な単位として文の材料として存在しているならば、文の材料として機能しうするための文法的なものは単語に定着していなければならない。形態論は単語におけるそのような、文法的なものを研究対象とする 鈴木1996: 34」と述べるのだが、結局は単語の中の文法的側面の研究を形態論と呼ぶのであるから、実際には単語論が主要テーマなのである。
- ² この益岡論は鈴木(2008)でも取り上げられ、批判されている。そこでは、益岡の命題とモダリティに文を2分類する考えが、単語を無視して文を形態素的に分けることにつながると見ているようである。三上章の文法論や時枝詞辞論を含め、日本語文法論の多くのは単語主義とは相容れないように思われるが、このことは別に扱いたい。
- ³ 岩崎(2000:36)では、鈴木のカテゴリー分けでヴォイスを「する／される」の二項対立とし「させる」を使役動詞としてカテゴリーからはずす点を取り上げている。ヴォイスの二項対立は、鈴木(1996:173-194)ではそのように読み取れるが、鈴木(1996:49)ではヴォイスに5つの態を記しており、鈴木の考えが完全に二項対立的とはいえない。
- ⁴ 奥田靖雄、鈴木重幸などの考え方がロシア語に関する研究から多くのものを学んでいることは、鈴木(1996)などに記されている。
- ⁵ 鈴木(1996:53)でも補助動詞について「2単語(以上)のくみあわせでつくられる形態論的な形を分析的な形(analytic form)という。継続相の形をつくる要素「いる」がそうである」と述べており、テイル形の2単語的性質を認めているが、実際には一体的考察をしていると思われる。奥田の影響もあるだろうが、テイル形を形態論のカテゴリーに押し込めようとするところから、分析的考察ができないのではないだろうか。
- ⁶ 通時の変化は本論では扱えないが、坪井(2005)では「活用形の一つとしてタ形が成立し、それと対をなして接続形テ形が成立しているということは、タ形を取り得るあらゆる場合に、テ形を取って文を接続・展叙させることもできることが文法体系にとって「望ましい」わけである p22」と述べられている。タ形とテ形が連関しつつ発展したというのはある程度認められるが、タ形が完了から過去へと発展したのに対し、テ形は動作の開始を表す働きも大きい。それぞれの機能の変化は考慮せねばならないが、課題のままである。
- ⁷ アスペクトによる動詞分類の意義は認められるし、動詞単独で使われるときに動作継続か結果継続かの意味が区別できるのも確かである。しかし、他の文の成分が付加されていくと、動詞分類の意義は薄れてしまう。この点で「テイルとは無関係にあらかじめ動詞をいくつかに分類しておけば、そこにテイルがついた場合の意味が決まる」というものではない 尾上2001:406」という指摘は、文を考察の出発点にすれば有効な反論だといえる。
- ⁸ 動作継続ではimperfectiveの規定が当てはまるが、テイル形全体にその規定は当てはまらないということは、テイル形という1つの形式にアスペクト的な1つの概念をそのまま適応させるのに無理があるということである。この点を、尾上(2001:410)では、テイル形にperfectiveとimperfectiveがあるため、形態論的カテゴリーとしてのアスペクトは認められないと述べている。他言語では形態素と文法的意味がきれいに対応しても、日本語でも対応するわけではないことを示す1つの例が、テイル形だと思われるのである。
- ⁹ テアル形も存在するが、テアル形しか使えないのは益岡(2000)で受動型のシテアル構文とされた、ある対象が配置され、ある場所に存在するタイプ「自転車が二台、店の前に置いてあった(p101の例)」と対象の変化した状態が視覚で捉えられるタイプ「スタイル画のスカートだけが黄色く塗ってあり(p103の例)」であり、それも受け身+テイル形で表すことが可能である。文主語が有情物でも非情物でも、テ形の後で、存在述語としてアルが排除される(イルを用いる)というのは、一般性の強い規則といえる。

¹⁰庵(2001)では、この繰り返しのタイプを、継続を表す「-てい-」の中では基本的用法と捉えている。確かに事態の継続という側面では典型的といえるが、テ形の方で状態性(存在性)をより表す点では、庵で考察から外した単なる状態のタイプに近いといえる。

¹¹庵(2001)で「この橋は5年前に壊れている」を効力持続、「この橋は5年前から壊れている」を結果残存としているが、後文は「～から」という事態の開始時点を示す語によりテの機能が開始の表示に変化したと解釈できる。そのため事態の終了点が不明瞭になり過去という発話時点からの切り離しができず、結果継続の解釈になったと考えられよう。効力の意味を読み取るには、事態が発話時から切り離されていることが必要なのである。

参考文献

- 庵 功雄(2001)「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4
- 岩崎 卓(2000)「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19-5
- 奥田靖雄(1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 尾上圭介(2001)『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
- 亀井 孝、河野六郎、千野栄一編(1996)『言語学大辞典第6巻術語編』三省堂
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 久保美織(1994)「日本語の動作・状態述語について」『国語学』178
- 鈴木重幸(1996)『形態論・序説』むぎ書房
- (2008)「文法論における単語の問題」『国語と国文学』85-1
- 坪井美樹(2005)「テ形接続形式と文法化」『国語と国文学』82-11
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波全書
- 野村剛史(2003)「存在の形態」『国語国文』72-8
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 三上 章(1953)『現代語法序説』くろしお出版
- (2002)『構文の研究』くろしお出版
- 守屋三千代(1994)「日本語の「アスペクト論」に関するおぼえがき」『日本語日本文学』4